

彦根景観シンポジウム 2006 世界の城下町・彦根をめざして

世界遺産への道 —100年かけて過去と未来の年輪を刻め—



彦根景観フォーラムでは、6月10日(土)、京町二丁目の夏川記念館で、彦根景観シンポジウム2006を開催しました。テーマは、「世界の城下町・彦根をめざして」。

国宝彦根城築城400年祭をきっかけに、彦根のもつ価値と、今後100年の「まちづくりビジョン」を考えました

第一部 彦根の脇街道と善利組組屋敷

母利美和・京都女子大学助教授

城下町の成立と脇街道 彦根の城下町建設は、慶長9年に始まった。都市部約5万人、領内約25万人の政治・経済

の中心を新しく創り出すため、中山道の流通機能を城下に取り込む計画が立てられた。鳥居本宿、高宮宿は慶長7、8年の中山道整備時に現在地に移転され、2つの脇街道



(彦根道)が設けられた。城下町には、問屋場「伝馬町」が設置され、「内町大通り」がにぎわった。脇街道には、塩、味噌、魚、麻布、古金、炭など特徴のある職種がみられ、当時の物資流通を知ることができる。

善利組の足軽組屋敷 足軽組屋敷は、初代藩主の頃(18万石)は、中藪六組、善利組十二組だったが、領知加増にあわせ善利組・大雲寺組が増設され、最大で1,120人になり大消費地を形成した。他の藩に比べ高禄で、敷地も広く建物は一戸建が基本で、組毎に隣接して建てられた。また、本来は世襲制ではないが彦根藩では職務を相続する傾向にあった。

城下町の景観の現状と課題 近代以降は、鉄道などの新



交通手段により旧街道は衰退し、内町大通りは商店街として活性化したが、脇街道筋は袋町の歓楽街や七曲の仏壇街へと大きく変化した。さらに、近年は、モータリゼーションにより、中心部の空洞化が進み、善利組屋敷は、昭和43年の158棟が、平成13年には52棟に激減、いかに保全するかが緊急の課題である。

また、脇街道筋にあたる裏新町、岡町、沼波町に点在する町家の保存、「内町大通り」にあたる立花町の道路拡張工事にともなう町家の再生、七曲仏壇街の継承など、将来の城下町・彦根のあり方を問う課題が山積している。

また、脇街道筋にあたる裏新町、岡町、沼波町に点在する町家の保存、「内町大通り」にあたる立花町の道路拡張工事にともなう町家の再生、七曲仏壇街の継承など、将来の城下町・彦根のあり方を問う課題が山積している。

第二部 町なみ保存・文化的景観・世界遺産

—築城400年を期して・城下町彦根の町づくり—

西川幸治・前滋賀県立大学学長

世界の城下町になるために 世界遺産には姫路城が登録されており、彦根城の登録はむずかしい。しかし、譜代筆頭の城と近世都市計画の理念であった身分制秩序をほぼ完全に実現した城下町は他になく、城と城下町の構成をきちんと位置づけるなら、世界遺産も夢ではない。



地域文化財の動態保存と文化的景観の保全 そのためには、城下町の景観を保全する必要がある。歴史的な建物などを指定し保存すると同時に、町なみ、道や堀、塀などの一体となった城下町特有の景観、暮らしと結びついた重要な景観を登録・表彰し、市民が愛し利用しながら価値を向上させていく「動態保存」の手法を導入すべきだ。

また、詩や和歌、小説に詠まれた文化的景観、たとえば松原の松並木、芹川のけやき並木、旧町名、旧外堀などを登録して表現することも大切。中央公園を外堀公園と変えることで城下町の価値が表現できる。「お城まつり」も、京都の時代祭のように、時代衣装を考証し10年計画で充実させたい。

まちづくりの伝統と保存修景の取り組み 彦根には史談会が芹川のけやき並木を守り、旧地名の継承に取り組んだ伝統がある。朝鮮通信使のみち、大名文化、武士文化の町なみ(点在する武家屋敷、組屋敷)、町人の町なみ(魚屋町、七曲など、どんつきなど)を登録し表彰して、歴史的景観を誇りをもって守り、育てていきたい。

伝統的建造物群保存地区の指定ができると、キャッスルロード・四番町スクエアのまちづくりが生きてくる。

クルマと城下町の共存では、400年祭に、郊外にクルマを誘導しバスで運ぶ



パーク&ライドの社会実験に取り組みたい。

歴史をいかした町づくりの実験 グローバリゼーションの波のなかで、地域の個性、伝統が簡単に失われている。ところが、逆に世界中の人々が、独自の個性をもつ地域に強いあこがれを抱いている。彦根市民は、今こそ、次の100年で「何を失ってはならないか確認する」ことが大切である。彦根は、人々に独自の価値を提供できる。築城400年祭は、「年輪をきざむ町づくり」を百年かけて手がける最初の一步でありたい。 (文責 桑野正則)



河原町通り周辺のミニ散策 安藤忠雄設計の夏川記念館、西覚寺、旧家老屋敷の庭園と茶室、昭和8年の銭湯、町屋店舗、七曲仏壇店と旧家具店、「花の生涯」の舞台となった袋町料亭と旧貸座敷、旧明治銀行など

連載 創造的修景を考える —よりよき次代のために— 建築家 戸所 岩雄

第5回 OLD・NEWとOLD&NEW

夢京橋のまちづくりに関わり、運動を展開してゆくにあたり創ったコピーが、「OLD・NEW 古いよさを生かした新しいまちづくり」です。OLD・NEWという理念を理解いただくために、



熱っぽく語ったことを思い出します。OLD&NEWという概念(古いものと新しいものとの共存、混成)ではなく、受け継がれてきたものの中にある合理性と美意識を新しく創られるものの中に生かし、次なる時代の魅力、活力となる創造を行うことが、彦根のまちの再生には最も適した理念であるとの思いから創ったものです。

ところが、最近の夢京橋のポスターには、「OLD&NEW」という言葉が謳われています。そういえば少し景観も変化(私から言うとちょっと?)してきたようにうつります。今一度、原点を確認することも必要だと思います。

夢京橋に続き関わらせていただいた「花しょうぶ通り」のまちづくりの「ふるあたらしい」という理念が、ある意味で本質を受け継いでくれているのかもしれない。

西澤文隆 著の『伝統の合理主義』の中の一文に次のような記述があります。

「復元とは何か — 出来るだけ忠実に初期の状況に戻すと言えば一見誠に結構なことに思われるし、本来は増築に増築を重ねて改変していくうちに造形的には美しいと言いかねる部分が生じてきて、純一無垢な初期の形こそ理想形と思われる。ところで初元の時点では、禅院の方丈にしてもどの塔頭も同じ方丈を創ったと考えられるから、今のよう塔頭ごとに個性のある表情を楽しむことは出来ない。第一文献がそれ程完璧に残っていることはあり得ないので

あるから、復原者の感覚が入り込む余地は十二分にあり、それを復元と言えるかどうかも甚だ怪しい次第である。

人が代々使ううちに、住む人の趣味によって、改変は常に行われる。その結果がそれぞれの塔頭の持ち味を醸し出してきたとも言えるのであり、こうした人間の引きずってきた歴史を無視して復元はありうるのだろうかと思いたくなる。もし誰かが復元状態を考察してそれに戻すとしても、むしろその人の創作と見なすべく、復元などと言わず、初元と思いながら創作するのだと言い切った方が責任がはっきりしていてよい。本来は現状のままで心ないデザインのために汚く納められた所にメスを入れて、今現在実施者が最も伝統的で清潔な処理と思われるデザインで切開手術をするのが、一番妥当な方法ではあるまいか。』



文中の“塔頭”を「まちなみ」、「町家」と読み替えれば、ことは明らかです。個の建物を見るときにも、まちなみをみるときに、共に心すべき真理がここにあります。ましてや建物の創造や景観の創出に関わろうとする者は心得ておかなければならないことだと思います。

